原爆被爆救援・賀北部隊

# 被爆五十年

手記

# 隊員の想い

賀北部隊友の会

# 賀北部隊の救援活動

（一）　昭和二十年八月六日、原爆が広島市に投下されて、間もなく広島聯隊区司令部の下令により、賀北部隊を編成。

（二）　部隊は賀茂郡北部地区（西条・高屋・八本松・志和の各町村）の陸軍予後備兵役の軍人、十七～二十二歳の未教育兵に召集命令を発し編成された陸軍部隊。

　受令者は６日夕～夜にかけ部隊の仮兵舎、県立西条農学校に出頭。

（三）　部隊編成は、二ケ中隊。工月隊を陸軍中尉　工月　清（西条）、高和隊を陸軍中尉　高和　正樹（志和）がそれぞれ結成した。両隊ともに三ケ小隊編成し小隊には分隊をそれぞれ編成。工月隊は、指揮班長として陸軍伍長　生塩　俊夫（西条）、第一小隊長に同、柏尾　誠（寺西）、第二小隊長に同、三宅　隆（寺西）、第三小隊長に同、山口　義則（原）の各陸軍伍長が任ぜられた。

　高和隊も同様、それぞれの小隊長が任ぜられ、総員二百五十名（？）として編成を完了した。

（四）　八月七日午前五時、西条駅始発列車で、工月部隊全員、広島へ。途中、線路普通のため、海田駅で下車。以西は、徒歩行軍。広島駅北側の東練兵場休止のあと、広島城跡内を通過して、西練兵場東北隅にあった聯隊区令部に到着した。（高和隊は七日～九日にかけて、順次、広島へ入市。）

（五）　工月隊は、広島城跡を中心に、七日～十二日まで、日中は被爆軍人の死体の処理、焼却活動に当り、夜は、安佐郡祇園・長束の民家の縁先に莚をしいて宿泊。

（六）　八月十三日、全員、広島駅より汽車で西条に帰り、部隊解散。

「発刊によせて」

東広島市 讃岐　照夫

この度、賀北部隊友の会では原爆被爆五十周年に当たり手記「被爆五十年隊員の想い」を発刊されることは誠に意義深いことと存じます。

この友の会では、例年八月七日に「原爆被災者救援之碑建立式典」を挙行されています。

この「救援之碑」は、昭和二十年八月六日広島に投下された原子爆弾により人類初の原爆犠牲者となられた方々の救援に赴き自からも入市被爆者となった当時の賀北部隊の記録として、また言語に絶する被爆の状況を後世に伝え平和を祈念する為に、部隊本拠地があった当時の西条農学校北寮跡地に見合う東広島市中央公園に昭和六十二年八月七日に隊員有志により建立されました。

原爆投下より歳月も大きく移り変わり、今年は忘れる事の出来ないあの忌わしい日から五十年と云う一つの節目の年を迎えました。

東広島市も核戦争の悲惨さと核兵器廃絶を訴え、恒久平和を願い「非核宣言都市東広島市」を標榜し、緑と平和の住み良い学園都市、福祉都市の形勢を目指して努力している処であります。

今日、日本は平和と文化の民主国家として世界において大変重要な位置を占めるに至っておりますが、かつての大戦で多くの人達が戦陣に散り、戦災に仆れ多大の犠牲を払ったことを忘れる事は出来ません。

原爆で廃墟と化したあの広島で、汗と埃にまみれて被爆者の救援にあたり、あの現場をつぶさに体験された元隊員の皆さんが、五十年を回顧して被爆の惨状を伝え原爆の非人間性を訴え、人類の平和を希求して、この手記を発刊される事は、「教援之碑」と共に原爆犠牲者に報いる途でもあると思います。

最後に、執筆された方々をはじめ関係各位のご尽力に敬意を表すると共に、この書が、多くの市民、特に戦争を知らない世代の人々に読まれ、平和の糧になる事を望んでやみません。

目　次

発刊によせて　東広島市長　讃岐　照夫

核兵器廃絶・世界平和を念じて　麻田　健二
八・六戦慄の追憶　飯田　豊秋
原爆と私　牛塩　敏夫
あの日の記憶　岡田　八郎
原爆被爆者救援に当たった賀北部隊々員　岡田　義教
戦争と原爆　奥廣　鉄男
ガレキの街から　河原　一行
原爆投下で防衛部隊出動　工月　清
原爆の想い出　武則　一司
被爆者の仏縁　寺岡　嵜
被爆体験を顧みる　橋本　成生
原爆の救援に参加して五十年に思うこと　古屋敷　定
五十年間脳裏に焼きついた惨状　前重　義明
ヒロシマの長い一日　松浦　忠臣
賀北部隊と被爆者救援　松田　義景
核兵器廃絶は人類生存への情熱　光野　昭三
核兵器のない平和を求めてー原爆の恐ろしさを知れー　光本　充晴
被爆五十年の回顧と懺悔　本岡　文三

あとがき

アイウエオ順

「核兵器廃絶・世界平和を念じて」

麻田　健二

終戦五十周年の正午を迎え記念サイレンと共に平和の思いを新たにし、犠牲者に黙祷後、あの時の思いも新たに原爆体験を記します。

一九四五年八月六日八時十五分、私は黒瀬町に於いて広島方面での一大閃光を見た。そしてキノコ雲が太陽を奪って何か大変なことが起きたと不気味な感じを受けた次第です。

翌日、私達救援部隊は負傷者収容のため広島に入市し最初に目撃した光景は「ビカドン」（当時の名称）一発の威力による凄まじい悲惨な姿でした。

家も電柱も爆風で吹き飛び又殆どが焼き尽くされ、被爆した人は真っ黒に脹れ上がり皮膚の剥がれた顔、手足、サンパラ髪に焼けた服など文字通りこの世の地獄で、水を求める人、うずくまってただ死を待つ人、生死の境に苦しむ何千何万の人、この悲惨さは何人もとうてい筆舌に尽くせるものではありません。あの惨状は五十年を過ぎた今も脳裏を離れることは有りません。今年は被爆五十年を記念して色々な形で核の悲惨さを訴える行事が行なわれましたが今後もこの核の恐ろしさ悲惨さ等、被爆体験を末長く引き継いで世界の核廃絶そして世界の平和を求めて行かねばと念じつつ被爆体験を終わります。

平成七年八月十五日記す

「八・六戦慄の追憶」

飯田　豊秋

―はじめに―

忘れることの出来ない過ぎ去った五十年前、昭和二十年（一九四五年）八月六日午前八時十五分あの忌わしい一発の原子爆弾で焦土と化した広島市。その戦慄が今もって消えません。

慰霊碑に納められている死没者名簿には、今年八月六日現在十九万二千二十人の方々が登載されていると報じられています。御霊のご冥福をお祈りしながら当時の記憶を辿ってみたいと思います。

―原子爆弾が投下された日―

雲一つ無い真夏の炎天下、朝早くから太陽は照りつけ「今日も暑いぞ」と言って家から八本松駅に出て、勤務先である呉市に向かって列車に乗り込み、呉線の坂～小屋浦間を進行していた時、突然、海田湾の彼方西の空に”ピカッ

“と閃光が走ったと思った途端に”ドン“と高音がしました。車内の乗客（自分も）から、なんだろうと、どよめきがあがり、列車はその折り一端は停車したが、すぐ小屋浦トンネル内に入り約三十分も止まっていたでしょうか、列車はやがて動き小屋浦駅に着き、車窓から西の空を望むと、広島市宇品付近の上空に真っ黒いキノコ雲が大きく上がっているのを見ました。

乗客の中からあれはひょっとすると、広島市皆実町にあるガスタンクが爆発したのではと、声も流れました。

列車はそのうち呉駅に着き、駅で広島市が爆撃されたことを知りました。
その日の夕方帰途につき、呉駅頭と海田市駅でも多くの負傷者をみて驚きました。

—防衛召集—

八月九日夕刻、防衛召集が掛かり翌日八月十日西条農学校に集合。賀北部隊（部隊長高和正樹氏）編成のもと、第二小隊 （小隊長吉本政吉氏） 隊員約七十名で一～七分隊に分割されました。私は第三分隊（分隊長小路守氏）に配属され、分隊長以下九名（朝月春三氏、朝原昭三氏、兼末一郎氏、木下芳郎氏、黒川忠信氏、近藤昭氏、内藤正義氏、藤岡学氏 …… この皆さんは、前記吉本様が所持しておられた名簿によります）一員でした。
その日西条駅から列車で出発して広島駅に到着、広島市に入りました。

—市内の惨状を目の当たりに見る—

広島駅に下車しての驚き、プラットホームの屋根が吹き飛んで青天井。地下道の周囲の壁が落ちススけて真っ黒焦げ。駅舎の建物は形をとどめているものの、これまた瓦礫化していました。

また、駅前から見た市内はあちこちがくすぶっていて一面焼け野原となっており、一望千里とはこのことかと思いました。見るに忍びない惨状を目の当たりにし、戦慄を覚えました。

—救援活動に当たって—

入市した私たち隊員は、その夜牛田町不動院で一泊し、翌日から広島城、大本営跡 （中国管区指令部）を基地とし、我々隊員の救護活動は天満町が主で小学校に野営を設営しました。

ほとんど手が着けられていない焼失校舎や家屋の瓦礫の整理、腐蝕した死亡者を探し出して死体が出る都度、隊長がその状態を克明に記録されました。その後校庭の一角に火葬場を設け、隊員の中にお寺の住職が居られたのでお経をあげてもらい、焼け残りの木材を持ってダビに付して遺骨の一部を記録書と共

に隊長が市に届けられ、残りの骨は天満川に流しました。この哀れな状況が今もって脳裏に焼き着いて放れません。
　この期間中の食事の不味さ。戦時中ですから食料不足は経験しているとはいえ、飯は今まで接したことのない大平釜（飯釜として）で炊いた玄米食をスコップでバケツにつぎ分けてアルミ食器に小分けする、汁といえばこれまた大平釜で海水に大根と馬鈴薯の輪切りを入れ、それにタクワン二切れです。それに群がるとハエと暑さとともに屍と火葬による悪臭で、食事は二、三日喉をまともに通りませんでした。
　この中に有って深夜歩哨（約一時間の交替）に立って蚊の襲来、闇黒の市街地のあちこちからは青く光るリンで気持ちが悪く恐怖を感じたものです。
　また、広島城の堀に数頭の牛馬の死骸が浮いていたのも忘れません。
　このような状況での約十日間の救援活動でしたが、隊員の皆さんと共に生き地獄の中での生活体験をしましたが、残忍極まるものでした。
　私は、除隊後体調を崩し約一か月余り寝込んでしまいました。その後も暫くすっきりしませんでした。

　―むすび―
　私は、広島市内に住んでいることも有って、平和公園によく足を運びますが、その度に原爆ドームを見るにつけあの忌わしい状況が脳裏を掠め、胸がジーンとしてなりません。慰霊碑にぬかずいても、また、原爆資料館を見学しても同様に当時の切なさを感じるものです。
　五十年の歳月が流れているとはいえ、今なお原爆症で多くの方々が苦しんで居られることを思うと忍びない気持ちでいっぱいです。私も医者通いはしているものの現在のところ寝つくこともなく、通常の生活を送っており有難い事だと思っております。
　あの残酷な戦争は繰り返してはならないし、核兵器の廃絶も叫ばれて居りますが、核兵器のない平和な世界が一日も早く訪れることを願いつつ当時を振り返って心に残っていることを記述してみました。
　皆様のご健康をお祈りします。

「原爆と私」

生塩　敏夫

　―忘れられないもの―
　月日のたつのは早いもの、原爆被災者教授に賀北部隊が出動してあれから五

十年、感慨深いものがある。
　眼をつむると、原爆投下の翌日昭和二十年八月七日のあの日に遭遇した一望千里の焼野ヶ原の様相が眼の奥底にハッキリと浮かび上がってくる。
　あの東練兵場ではじめて出合った、顔の皮膚は焼け爛れ皮が捲れて垂れ下がり視力も失っていた姿の憲兵さん、既に息絶えた母の乳房をさがし求める乳児の仕種と泣く力もない声 …… 等々。
　五十年間の中途の事はとっさに出て来ないが、八月七日の昼前はじめて足を踏み入れた広島のあれもこれも眼に浮かび心に浮かび、やるせない思いで一杯である。
　広島に在住する私の知人（八十三才）と最近出会って被爆時の様子を聞いてみるとあの原爆が炸裂した時のことを今日か昨日の事かのように、次々と語ってくれた。まるまる二日間、一歳の長男と妻に出会えずさまよい歩いたことなど …… 。
　直接経験した人、救援に行って惨状に相遇した人にとっては、たった一個の原子爆弾が人も物も、都市機能もすべてを無にしてしまった未だかつて見たこともなく、聞いたこともない威力をもつ爆弾の前に慄然とし、記憶と云う印画紙に強烈に焼き着いたのかも知れない。

　―五十年たった今―
　とてつもなく強大な爆風、鉄をも溶かす以上の高温度の熱線、人体を蝕み機能を破壊する放射線を放つ原爆。今年八月十七日に中国は地下爆発実験をしたが、東大地震研究所でデーターを出した破壊力は TNT 火薬の二〇〇キロトン程度で、広島型原爆二〇キロトンの十倍以上ではないかと発表されたのを見ても、原爆は五十年前に比べて比較にならない強大な物となっている。
　核保有国は核の強大さにしのぎを削って狂奔して来た。その結果はどうだろう、東西冷戦終結に大きな力を発揮したソ連のゴルバチョフ氏は、先般 NHK の記者に次ぎのように語っている。「旧ソ連は、核の製造に予算の多くを使い、一般産業は遅れ国民の生活は疲弊した。また、核の保管にもその安全が補償できない状態であり、多くの人々を核の汚染にさらした」等々と云っている。
　今年の八月は、仏の核実験を中心に世界中が騒々しい、仏国際関係研究所のモイジ副所長は仏核実験の中止は絶対ありえない。フランスの核抑止力がドイツや欧州防衛に重要と思っていると語っている。
　また、日仏大学生が広島で行なった核実験議論で、日本側の学生代表は、仏学生の云う核開発競争をバランスと呼ぶのは幻想だと云っている。
　今年もまた、八月七日に賀北部隊の元隊員や遺族が「賀北部隊・原爆被災者救援之碑」の前に集まって記念式が挙行され、原爆の悲惨さを後世に伝え、平

和への祈りを捧げる決意を新たにした。その際、私は中国新聞の記者の「今の心境はどうですか」の質問に「半世紀たっても原爆が人類滅亡の凶器だと云うことが世界に伝わっていないのが悲しい」と答えた。核廃絶に至らない事由はどこにあるのだろうか、その国のみの安全とか、その民族のみの安全の保証のためと云うのであらうか。

世界中の人々が、一人一人ひとごとでなく、自分自身が核の無残さ無情さを知る事より始まるのではあるまいか。

一日も早く核実験を中止し、やがては、核廃絶の時のくることを祈って止まない。

“原爆被爆後五十年の切ない憶いである。”

「あの日の記憶」

岡田　八郎

「とにかく見る影もなかった、あんな悲惨なことは二度と有ってはいけない」賀北部隊の幹部だった私は、昭和二十年八月六日の午前八時十五分には部隊本部が置かれていた西条農学校で何時ものとおり勤務に着いていた。

昭和二十年五月、賀茂郡北部地域に防衛隊の組織を作る命令を受けて召集され、米軍が上陸して町や村で戦闘が行なわれることを想定して訓練に励んでいた矢先に原子爆弾が投下されたのでした。北西の空にキラリと光るものが見えた瞬間、青空に灰色の幕が覆った。「志和か吉田町の方角で落下傘のようなものが落ちている」と云うので西農の生徒を療養所あたりまで走らせた。それからしばらくして広島から連絡係が到着して広島の惨状をしり、午後から部隊召集が始まったのである。

私は状況を掴むため六日の夜、被服廠のトラックを出して貰い夢中で広島に向かった。広島市内は大火災が発生し燃え続けていたので、やむをえず大正橋付近で下車をして基町の連隊本部へ急いで歩いた。

途中、京橋に出たところで沢山の死体が川に浮いているので「こりゃ、大変な事になっているなと思いました」。やっと連隊区司令部（現在の広島城付近）にたどり着いたが見る影もなかった。炭のようになって真っ赤に燃える建物群、転覆した電車、行き仆れになっている人々、とにかく悲惨じゃった。

連隊区司令部に報告した後私は、やがて到着する賀北部隊のために二〇〇個のむすびを手配して東練兵場で工月隊と合流し食事のことを引き継ぎ、西条に帰った。

終戦後は、部隊の活動や構成を記した書類、鉄砲や兵器、軍隊手帳などすべてを焼き捨てた。「兵隊のことは全部忘れたかった、戦争で多くの仲間が死んだ、悪夢を見る思いであった」。

西条に帰ってから入市被爆が原因だろうと思うんですが、皆が次々と死んで行くんで私も気持ちが悪かった、本当にようここまで生きてきたと思うのが実感です。昭和二十四年、酒都西条で酒販会社を起こし現在に及んでいるが、これも平和が有って生きて来たからで、皆の分まで頑張らにゃいけんと常々思っている。

西条栄町中央公園に建立した賀北部隊の救援記念碑では毎年八月七日の朝、記念式典が営まれる、私も常に参列して物故者の冥福と恒久平和を祈っている。

「原爆被爆者救援に当った賀北部隊々員」

岡田　義教

八月六日、国鉄西条駅構内で作業中突然轟音と同時にピカッと異様な閃光が走った。広島の上空は灰色の雲が発生、一瞬なに事が起こったのか業務連絡の電話も通じずみんな不安を抱いた。

午後になって始めて列車が到着し、怪我人の顔は真っ黒着衣はボロボロの人が下車され、病院の手配などでごったがえした。広島は、これは大変な事態になったと直感した。その夜防衛召集令がきたので直ちに西条農学校に集合した。

八月七日早朝の列車で広島へ救援に行く。まったく広島の街は異変が起こっていた。東練兵場から見渡す限り焼けの原、まだ至る所で燃えていた。火傷を負い皮膚が破れ重傷を負った人、黒焦げになった電車、おびただしい死者の遺体まったく想像を絶する悲惨限りない状態であった。

大本営跡に到着してまず負傷者の収容を命じられ、西練兵場付近の軍人を三篠橋の川土手に設置されていた仮野戦病院に何人かの重傷者を担架で日没まで収容した。

夜は祇園町長束まで行き民家に分散して縁側等で寝させてもらいここから六日間、八月十二日まで毎日大本営跡へ往復した。

前日に続き怪我人の救出、私達の班は広島城が倒壊し全員が下敷きになっている女子学徒動員の生徒の救出命令が出た。城の石垣の下に赤い鼻緒の下駄が

整然と並んでいた。大きな城も一発の爆風で吹き飛ばされたらしい、屋根瓦を取り除き鋸ぎりなどを使い手作業で一生懸命に救出したが、残念ながら一名の生存者もいませんでした。

数名の女の娘の遺体を救出し防空頭布や名札で比治山女子校の生徒さんでした。私達と同じ年代かと思った。家族の方が安否をきづかわれ数人こられ涙の対面、あの惨状は今も忘れることはない。

九日頃より遺体の収容及び火葬、城の堀端から西練兵場付近の遺体を担架で幼年学校の校庭まで運んで焼却班に引き渡す作業の繰り返しでした。爆心地直下附近だけに着衣は続け、裸同然で、体の正面から閃光を受けた人は体は黄色に変色し、真夏の炎天下で遺体は腐爛し腹の中なら内臓がめくり出てこの世の地獄であった。

あの悲惨な状況は二度と思い浮かべたくない。あの原爆の残酷なむごさはとても文章では表現できない。

八月十三日他の部隊と交替して西条に帰り解散した。

原爆被爆者救援に当たった賀北部隊の隊員の一人としてあの日から五十年被爆実体の風化が云われている中、他の隊員の方と文章が重複するかと思いますが救援の体験談に投稿させてもらいました。当時十七才で三食握り飯二個程度、あの炎天下で良く頑張ったと思います。

核兵器廃絶を世界に訴え続ける被爆地広島・長崎の声を無視しないで核実験もしない、平和な世界でありたい。

## 「戦争と原爆」

奥廣　鉄男

私の戦争は昭和十六年四月十日現役兵として西部第六十部隊（福山市）に入隊し、翌十七年一月一日比島リンカエンに上陸して一月十二日の戦闘に於いて左目失眼の日から私の戦後は終わっていません。

昭和二十年二月と五月の二回防衛召集があり西条に集まり広島に行き十二日間駅や橋の警備をしました。

原爆投下の二日目に原爆被爆の救援隊として出動命令を受け翌日の朝早く西条駅から汽車で海田駅まで行きそれから先は線路を歩いて広島駅を経て夜、観音小学校へ着きましたが途中市内一帯の惨禍を見て唖然としました。

観音小学校と後ろの竹藪が私共の仕事場でした、竹の中には藁や莚を敷いて五百人位の被爆者を収容していました。

皆真っ黒に焼けただれて髪の無い人、耳の無い人、熱は下がらず血も止まらずその内二十才前後の若者が息絶えて行く、竹藪の藁の中で水をくれ、起こしてくれと云う人の口の中、耳の中にウジがわいているのです。こんなことは南方戦線でもまた後から見学した原爆資料館でも見たことのない体験です。

そうした方達を看護兵十人と私共十名で看護するのですが竹藪の収容所ではなんの治療を施されずに虫けらのように死んで行きました。上半身真っ黒に焼けてその時の姿はこれが人間の死かと思いました。

毎日一日に二十、三十人は校庭で家屋の柱や板の破片を集めて火葬しましたが竹藪の収容所で何の治療も施されずに熱いようと声を残して息絶える人は毎日後を断ちませんでした。

今の平和な世の中の陰には多くの犠牲が有った事を決して忘れてはならないし命より尊いものはないと思います。

私も平和は望みますが、今の世の中の人は戦争と云うことを忘れて平和ばかりある様に思っているのでしょうか。

今も世界の国のどこかで戦争をやっています、日本の家庭の中でも親と子が殺し合っています。自動車にしても一年の間には二万人も死亡しています、これも小さな戦争でしょう。原爆にしても戦争の中で落とされた事を知って貰いたい。

この原爆が十日も遅かったらロシヤの軍隊が東京の方まで来て日本も韓国のように二分されて東京から東はロシヤ、西は米国、今の日本は無いかも知れない、そのことを思うと今の日本は良い国と思います。

長い間待っても北方四島は帰ってこないが、これも今後、戦争の時にロシヤには必要なのでしょう。

若い時に遭遇したフィリッピンでの闘い、被爆の実体を経験して戦争の無益と空しさに比べ平和の尊さと有難さをつくづく感じております。世界中が平和であることを祈って筆を置きます。

## 「ガレキノ街から」

河原　一行

“ピカドンでヒロシマは一瞬のうちに壊滅した”昭和二十年八月八日急遽被爆者救援賀北部隊が西条農学校グランドで編成され私は分隊長に任命された。

部隊は西条駅を十一時頃に広島へ向かって出発、列車はモクモクと煙を吐いて進むが乗客は誰も無表情で無言であった。車内で大豆の入った握り飯が二つ

ずつ支給された。青天井の広島駅に降り立つとガレキの街が広がっていた。食いさしのトマトが投げ捨てられて真夏の陽射を浴びていた。

広島駅で市役所庁舎まで食糧運搬を命じられ隊員五・六名と瓦礫の中から車輪を拾い板切れにくくり付けて叺いりの糧食三個を何とか載せた。

途中、窯の傍らで向かい合うように座ったままの焼死体が目に止まった。学校の塀が倒れて沢山の人が下敷になって死んでいた。電車通りに出るとレールがアメのように曲がっていた。浅野図書館の玄関前にはおびただしい血が洗い流されていた。

市庁舎に辿り着くと既に部隊は出発していた。人伝を頼りに横川駅から更に牛田方面に歩いて行った。それは敗残兵の逃避行のようであった。太田川沿いの堤防には大木が勢いよく燃えていた。突然何処からか二頭の子豚が現れた。捕まえてやらぁと追いかけたが、意外に子豚の足は俊敏であった。

部隊は不動院の裏山で蚊帳を吊って野営していた。夜空は何事も無かったかのように星が瞬いていた、やっと上半身を蚊帳に入れて空腹のまま眠りに就いた。

馬のいななく声で一夜が明けた、直ぐ近くの山中にピカで焼け傷ついた軍馬が綱がれていた。分隊は朝から逃走馬捜索の任に当たった。

午後になって中隊は市の中心部に移動した。大本営跡の広場に天幕を張った。翌日思い掛けなく多量の肉の支給があった。後でそれは馬肉だったと云う情報を耳にした。

中隊は転々と移動して観音小学校グランドに落ち着いた、焼け残りの木材を集めて一日がかりで仮兵舎が出来上がった、中隊には大工も僧侶もいてそれぞれの分野で役立った。

翌日からグランドは火葬場に急変した、仮看護所や通報によって次ぎ次ぎに死体が運ばれて来た、殺到した時は数体を並べて毘に付した。兵舎の近くに埋もれた陶器がそのままあった。壷を探して納骨し僧職が読経をあげて弔った。あたかも虫ケラの様に死んでいった人々へのせめてもの供養であった。

夕方歩哨に立ち、夜は橋の真ん中で大の字になって仮眠を取った。肉親に異変があったのか朝方荷車の音が静寂を破った。そして今日も熱地獄の長い一日が始まった。

その日は隊を挙げて陸軍幼年学校と思われる焼け跡に出動した。散乱した馬蹄の鉄釘を回収する作業であった。

午前中張り切って指揮した現役兵の班長が午後から急に元気が無くなった。帰途、血相を変えた将校が慌ただしく往来していた。兵舎に帰って小隊長から終戦の玉音放送があったことを聞いた。怖れていた予感が現実となって無念の涙がほほを伝った。

その晩中隊でちょっとしたクーデターが起こった。中隊長が本部付の下士官と酒を飲んでいたところへ怒った上等兵が殴り込みを掛けたのであった。幸い大事には到らなかったが一時は険悪な空気が流れた。

敗戦の虚脱感から軍部への信頼と教育への信念も音を立てて崩れる思いであった。

“干天続きのヒロシマに鎮魂の雨が降った”

ようやく帰郷命令が出て、独りで広島駅から汽車に乗った。水筒を忘れて兵舎に引き返し隊から離れた報いであった。路傍には赤銅色の死体が転がって口や鼻からウジの行列であった。

八本松駅で下車して歩いて我家に向かった、これからの運命がたとえ凶であらうと今日生きて帰れることは幸運であった。

今年被爆五十周年を向かえ感慨またひとしおである。多くの人々の犠牲を盾にして戦後の平和を享受したことに、今一度あのガレキの街に敬虔なる祈りを捧げたい。

「原爆投下で防衛部隊出動」

工月　清

一　部隊編成

八月六日午前八時十五分米軍機 B29 により原爆攻撃され、午後召集令状により旧西条農学校に集合、三ヶ小隊よりなる一ヶ中隊を編成し賀茂北部隊と称す。

応召者 将校 一名、短期現役出身下士官 四名、未教育兵二〇〇余名（中学五年生を含む十九才～二十三才位）

二　任務

速やかに広島聯隊区指令部の指揮下に入り、広島市内の警備、被災者の救援に任ずること。

八月七日早朝西条駅を一番列車にて出発、海田市駅下車、広島周辺上空には敵機が二機飛んでいたので警戒しながら東練兵場に入る。途中、重傷者を救出しながら、聯隊区指令官と連絡をとる。

三　担当地域と作業

西練兵場を中心とした一帯、電車通りから城北にかけての陸軍の中枢地域で負傷者の収容、死者の処理などの任務につく。

重傷者のウメキと散乱する死体の中で各小隊の担当区域を決めて、早速重傷者の救出より作業をはじめる。火傷、骨折、失明など熱波と煙にやられて気息奄々とした重体である。

死体は裸同然である。男性で軍袴様のズボンをはいた者は上体が裸で伏せの状態であり、女性の多くは反対に肩のあたりにポロ切を着けただけで両手を上に抱くような恰好で仰向けに転がっている。身許の確認できる者は一人もいなかった。

西練兵場に長方形の穴を掘り、散乱している木材などを下に敷き、その上に死体を約七十体ぐらい並べて毎日火葬した。

七日以降、真夏のカンカン照りの炎天下死臭漂う中の重労働である。兵の疲労が重なり数名の脱落者が出る。

日々の掘った穴の数、焼却した死体の数は不明であるが五日間に焼却した事を思うと相当な数であったと思う。

広島城の北の工兵学校と思われる校舎の焼け跡には、教室の入口に頭蓋骨が累々として重なっていた。一瞬の熱波の仕業であろう。

濠端で、救援に来ていた旧友の軍医に遭って従軍中の話などを交わし、お互いに元気でやろうといって別れたが、一カ月後にはその訃報に接した。

四　帰還

八月十三日任務を終わり午後広島駅を出発して西条に帰り、午後四時西条農学校々庭で編成を解き中隊を解散した。

当時、私は三十八才で歳もいっており凄惨な戦場経験も有りましたが、何にもましてあの地獄絵は五十年経った今でも忘れる事ができません。

ましてや、当時、隊員の殆どの皆さんが多情多感な青年であり、大変な衝動を受けられたことと思います。あの熱い炎天下、汗と埃にまみれて負傷者を運び、多数の死体を焼却した隊員皆さんの苦労はなかなか忘れるものではありません。

二度とあのような惨事が起きないように、ひたすら願う次第で有ります。

「原爆の想い出」

武則　一司

“ピカドン一発で戦争は終わった”

昭和二十年八月六日午前八時十五分広島市上空を一瞬原爆閃光の中黙々と積乱雲が湧き出して広がり「あれは何だろう」翌朝の新聞を見て秘密兵器爆弾と

書いてあった。私たち賀北部隊は吉本隊長以下八十名が召集され、昭和二十年八月九日西条駅を午前九時出発、そして十時に入市した。

貨物駅より市役所まで道に股がる柱を片付け乍ら徒歩で行きました。道の両側の瓦礫の中より人体のくすぶる悪臭が鼻をつく炎天下の中汗びっしょり、所々に柱や塀の下敷きになり押し潰された死体が見えた。橋の欄干は焼けており電柱は半分に折れて上の方は燃えていた。

惟えば私の弟一秋が昭和十四年一月志願兵として呉海兵団に入隊して潜水艦に乗り昭和十八年三月珊瑚礁の海戦に敵の爆雷攻撃を受けて海底に沈み戦死をしました。

以来私は可愛そうでならないので弟の写真を肌身放さず抱いていました。

入市して散々と横たわる原爆死の遺体を見れば弟一秋の戦死が思い出されます。さぞ苦しかっただろう私は涙そして又、涙しました。

入市した同日午後二時ごろ食糧を頂き市役所から天満小学校に落ち着いた。その日は川沿いにテントを張り寝る支度をした。

翌八月十日朝、炊事斑五人を残し道路清掃班・死体焼却斑・病人看護班の三班に分かれて救援活動を開始しました。私はどの班も経験しましたが全く生き地獄そのもので筆舌に尽きない悲惨な情況でした。

途中八月十五日正午までに紙屋町五師団の入口に集合し正午から天皇陛下の玉音放送を聞きました、若干の現役兵は声を上げ涙を流しました、私も頬に涙が止まらなかった。

市役所の要望により一週間の予定が八月二十二日まで二週間の救援活動になりました。

大和魂と竹槍では所詮勝てない戦争も、原子爆弾により戦争に終始符を打ち人的物的の被害を最小限に食い止めたとは言え私は、世界の道義上あくまでも銃器により戦争を終結してほしかったと思います。

さり乍ら戦後五十年の日本が今日の世界経済の一等国になったのは敗戦国からのし上がった国民の努力もさり乍ら私は戦争の犠牲者が残した大和魂のお陰だと思って感謝して居ります。

「被爆者の仏縁」

寺岡　嵜

昭和二十年八月六日の朝 －後から八時十五分と判ったが－ 農作業をしていたところ、一瞬目の前を青い光りが走り、それからすぐ強い風が吹いた。間も

なくして『ゴー』と云う音がしたと思うと西の方の空へ巨大な雲が立ちのぼった。巨大な雲と云うのは今日云われているきのこ雲のことであった。
一体何事が起こったのか？ ガスタンクが爆撃されたのかなどと噂したものである。その日の夕方になって広島の町から帰ってきた人達に『町が全滅だ』と聞かされたのだが、その人は宇品であったり、駅の近くであったりと方角がそれぞれであるにもかかわらず、皆が同様に『大変な事になった』と話され、爆撃の範囲がどれほどであるのか不思議に思ったほどである。
また、広島の街から私の住む所までおよそ四十キロメートルもあると云うのに閃光や爆風を感じて、どれほどの威力を持った爆弾かと想像もつかなかったのである。
後で広島の街を自分の眼で見てその惨状に、今までとは比較にならない程の威力を持った新型爆弾であることを知ったのである。そしてそれが世界で始めて投下された原子爆弾だったのである。
私が賀北部隊として広島へ被爆者の救援に行ったのは原爆投下から四日目の八月九日の事であった。行動を共にしたのは三〜四十名であったと記憶している。
広島駅に降りて先ず驚いたことは市街が焼け野原となり宇品まで一望できることであった。活気に溢れているはずの街並や賑やかに行き交っているはずの電車や人々の影はなく、焼け残った福屋百貨店と土蔵が僅かに見えるだけであった。
その焼け野原を市役所まで歩いて行ったのだが、着いた市役所の玄関は血まみれになっていた。そんなところで指示を受けて担当の地へ向かったのであるが、途中電車が横倒しになったり、馬車の馬が倒れて死んでいたり、川にはうつぶせになった死体が何体も浮いている等々、想像を越える惨状が続いていた。
我々が被爆者の看病に当たったのは、横川の南の方の河川敷に設置された屋根はトタン張りで壁も無くムシロを敷きのべた名ばかりの病棟（五棟）であった。
病棟には焼けた皮膚がむげてズルズルになった人、虫の息で横たわっている人、そして気の毒なことに被爆のショックで自分自身を失い熱さから逃れる為か川の中に入って行こうとする人達もいた。中には傷付いた子供を負ぶってきて看て貰おうと背中から降ろした時には既に息絶えていたと云うムゴタラシイ光景もあった。
軍医や看護婦の方々も居られたがその数は僅かで、また当然のことながらたいした医療器具や薬もなく、怪我人の傷口や火傷に赤チンを塗って上げるのがせいぜいの治療であった。また水を欲しがる人に水を飲ませる。夏場である為

傷口に沸くウジ虫を取るなどが我々がして上げられる精一杯の看病であった。
　そんな怪我人の中にも身元の判る人は担架で家まで運ぶ事が出来たが、身元の判らない人、動かせない人はムシロの上で横たわっているしかない状態であった。
　充分とは言えなとも皆の一生懸命な看護があったにもかかわらず、毎日三人～十人の方々が亡くなっていくのはどれ程空しく辛いことであったか、更にそうした多くの遺体を河川敷で壊れた家屋の材木など集めてその上に並べて火葬することは、どれほど胸をえぐられる思いがしたことか。
　ただ、そんな中にあって救われたことは我々隊員の中に、今は亡くなられている八本松町吉川の西福寺ご住職根来祐全氏と西条町田口の善教寺ご住職広幡房丸氏が居られた事である、お二方お若い人ではあったがあの様な混乱の時にあっても、御数珠に輪袈裟を持参されており、流石に僧職の方の心掛けの違いに感心したものでした。そして火葬に際してその都度心を込めてお経を上げて下さったのである。
　痛い痛い助けてほしいと言いながら死んでいた人達。うちの子はどうなっているだろうかと心を残しながら死んでいった親達。又お母ちゃん、お母ちゃんと苦しさと寂しさに泣きながら短い生涯を閉じた子供達。いずれの人々も我家の布団の上と云う訳にもかないで、体にむごい傷を負うたままの無念の死であった。その弔いにご住職のお経を頂いて何とか心を救われながらお浄土に導かれて行かれた事と思う。当時の状況であれば河川敷で無げに焼き放たれても仕方の無い事であったが、ご住職のお陰で人間らしく見送られたのである。
　数少ない身内の方も、縁あって看護させて貰った我々も一緒にお経を頂いて、悲しい葬儀ではあるが何と有難いことよと涙を流したことである。
　約二週間の任務に多くのご遺体にご縁を頂いたが、その一命一命がどれ程重く大切なものであるか、お経に合い乍ら心に深く刻んだのである。
　時代の情勢であったとは云え、一度に多くの命を奪ったり、後々まで病気で苦しめられるような核爆弾を行使したことに着いては深く反省すべきである。
　そうして人類の未来に恒久平和を願うなら、戦争反対は勿論の事、核戦争利用を禁ずることを叫び続けていかねばならない

「被爆体験を顧みる」

橋本　成生

　昭和二十年八月六日の朝は好天気で、自分は家の田んぼで草取りをして居ま

した。
　午前八時十五分、突然の光りと音がしてやがて西の空に黒く大きな雲が上がりました、何が起きたのかと田んぼの中で作業をやめて西の空ばかり見ていました。
　その日はなにも情報がなくて夕方頃より本線の汽車が通らない様に成りましたので事故が有ったのかと思う内に夕暮れと成り一日の仕事も終り家族一同夕食しました。
　しばらくして自分が床についた八月六日夜中十二時頃と思いますが、突然防衛召集令状が家に来ました。素早く友人と二人で西条農学校の校庭に行きましたがもう先発隊は既に広島に行って居ました。
　それで自分達は後方隊として西条駅より汽車に乗って向洋駅まで行きそれから先は全員で歩いて広島駅に入りました。途中沢山の怪我人や火傷をした人に出会いました。広島市内には午前十時頃に入ったと思います。
　先発隊と一緒に五師団にて部隊編成されて第二防衛隊として軍隊の救護に当たる事になり、班長は西条町寺西の三宅隆先輩でした。
　約一週間滞在して夏の日照りの中毎日沢山の兵隊を救援し又沢山の兵隊と数人のアメリカの捕虜を焼きました。夕方になると隊員は全員歩いて今の安佐南区の民家に行き、屋外で夕食を取り風呂は川に入って体を流して休みました。毎日夏の暑い広島でした。その間にも市内は延々と猛火でとても暑かった。
　広島市民子供学生婦人老婦共々に防火水槽に頭を浸けて死亡し又半身火傷をして 「水、水」と歩いている人、色々と沢山の人でした。
　それを見た自分は若い十六歳で、ふと頭に浮いた時、人類の終末かと心を打たれました。色々と思いは沢山有りますが書くことが出来ません。
　最後に一句添えます。
　夏の空　キノコ火の玉　この無情

「原爆の教授に参加して五十年に思うこと」

古屋敷 定

　昭和二十年八月六日広島原爆が投下され教授の為に賀北部隊へ召集されて八日に広島に入った。賑やかだった街は見る陰も無く一面の焼けの原となっており驚き呆然となりました。一週間ほど前には警備召集で広島の市街を走り回っていたのであの時の街の記憶は嘘の様で、私達もあのまま広島にいたらと考えると慄然としました。

部隊は広島駅に着いて先ず三人が使役で小車を牽いて市役所へ食料を受け取りに行き帰ったら夕方に成りました、又命令が出て歩いて移動し横川の川土手らしいところに着いた時は夏の長い日も薄暗くなり見通しも悪く、なにやら前方に高く積まれた山に火が燃えているのを見ながら友人と持参したむすびを食べました。それは火葬の火と言うことが後で判りました。

暗くなって小隊長より見張りに回るように云われた。莚張りで作られた小屋の中に被爆により火傷をして裸同然の哀れな姿の人々を見るにつけ何とひどい目に逢わされているなと思いながら回っていると、断末魔のような声で兵隊さん水をくれと云われるが、水を与えると生命に係わるので飲まさないように止められていたので可愛想だったが水は飲まさなかった。

夜が明けて到るところの陰から患者の死体を担架で広場に集めて並べ、検視が終わると並べた死体の上に焼け残りの木を集めトタンで覆い火を付けると、暑い時で風が吸い込まれるように吹き火葬したが、さながら地獄とはこの事かと思いました。

又ある時は、叺などを持って残骸の死体を集めて火葬し、夜は月明かりで街通り警備に回ったりした。暑い中でしたが皆んな一生懸命にやりました、今思えば若い時だからできたと思います。

八月十五日ラジオで天皇陛下の終戦のお言葉を聞いた。戦争は終わったのだが進駐軍が来る噂や今後の事などどうなるか皆んなで話し合っていましたが心配でした。

翌日部隊は解散し汽車で西条に帰り皆と別れました。終戦により食糧は不足し物も無くなり今までの生活とはガラリと変わった生活となり大変苦労しましたが次第に日本も復興し品物も豊富になり現在では昔のことは考えられない程生活も豊かになり、平和は有難いことだ、長生きをさせて貰ったお陰だと思っています。

今年は原爆が投下されて五十年になりますがフランス・中国は核実験を強行しました。広島・長崎の被爆者はこうした核実験に反対の運動を盛んに行なっておられ又世界の国の人々も原爆を戦争に使用すると地球の破滅になると反対しています。

日本は最初の被爆国ですから核実験原爆反対に粘り強く運動してはならないと思います。

もう二度と戦争を起こさぬよう子や孫にもよくよく教えなければならないと思います。

「五十年間脳裏に焼きついた惨状」

前重　義明

昭和二十年八月六日広島県立西条農学校の朝礼で全員東方に向いて整列をしていたところ、後方（広島方面）に「ピカッ」と閃光を感じた。

これが後日明らかにされた、広島市に投下されたあの原子爆弾の炸裂とは誰しも知り得なかった。

その日は連日の例により勤労奉仕のため国鉄西条駅に行き、貨車に米（玄米・四斗入り・十六貫目）を担いでの積み下ろし作業であった。

昼前頃からは広島方面よりの列車で、見るもいたましい火傷や負傷した多数の人が輸送されて来た。私達は急いでこの方がたを保健所や国立広島療養所に担架で移送するものとの分担作業となった。

私達学生間では、広島のガスタンクの爆発だとか特殊な爆弾が広島市に投下されたのだとか、げなげな話しに花が咲いた。

下校時、×君が「召集令状が来た」と言ったが私は×君に対して返す言葉もなく、ただ一言「元気で」と言い二人は無言のまま別れた。

オンボロ自転車での「大変な事になった、日本はどうなるのだろう」今日一日の出来事と重ね合わせて、あれこれと考え想像しつつ帰宅した。

どうしたことか何時もは多忙な父が今日に限って家の前で私を迎え「おお元気で帰ったか、暑かったろう」と声を掛けてくれた。

山盛りつがれた白いご飯の食卓に、終始無言の母を始め叔父、弟妹の八人がつくと父が、おもむろに差し出したものは私に対する召集令状であった。そして「お前は可愛そうに、今までの出征兵士の様な見送りができないが、体を大事にして頑張れ …… 今日は何も出来ぬが腹一ぱい飯を食べて早く休め」と言ってくれた。

八月七日朝賀北部隊に入隊（西条農学校に集結、広島の救援・整理などの作業を主目的として新に編成された陸軍部隊）同日隊は、広島に移動する。

入市の瞬間これはどうしたことだ、驚嘆して声も出ない、城がない、まともなビルが無いお家も無い、緑の木も無い、目に入るものは一面瓦礫の焼野原、その中にポツンポツンと焼け崩れかかったビル、骨組みだけの電車、自転車、眼前には 被爆死体や負傷者 …… 。筆舌に表す事の出来ぬ惨状である。

授業料を納めている一学生の私だが、学生服に一ツ星を付けていると陸軍二等兵である。軍律厳しいなか、広島城跡附近で負傷者の救護、被爆死体の処置、焼け跡の整理など、など、連日酷暑の中での作業に疲労困憊。六十年間は市内に住むことも出来ぬ等の噂。

十五日正午の戦争終結のラジオ放送、あまりにも大きなショック、体験で放

心状態で感動する気力も薄らいで来た。それから一両日過ぎてからは、牛田不動院附近の山林内で軍馬など約二十頭の治療に従事する。ほとんどの馬が右側か左側の半身が焼け爛れている、三尺四方位の爛れた皮膚を剥して木炭の粉末のような薬を付けて手当てをする。蹴る馬、かみ付く馬、さすが馬好きの私でもたじたじの連続であった。この時、上官が「馬には新鮮な草を十分に与えよ、お前達は帰ったらトマト、南瓜を多く食べ、できればアルコールも」と告げた事を今も忘れない。

あれから五十年、あの惨状とあの時の体験は常に私の脳裏に焼き着いている。これからも忘れることはあるまい。

「ヒロシマの長い一日」

松浦　忠臣

私は当時安芸中野駅に勤務しておりました、八月六日自転車と汽車を乗り継いで七時五十分頃駅に着きました。

点呼は八時十五分からなので同僚と話していたところ、飛行機の音がしたのでホームに出てみたら北の方に飛行機が止まったように見えてその後部より大きい風船がでたので皆に知らせたその時でした。突然「ピカッ」と稲光りの様な鋭い光りが走り続いて「ドン」と云う大きな音と共に地響きが起こりましたので皆んな地べたへ伏せました。しばらくして目を開くと駅舎の窓ガラスや壁、時計が壊れて落ちていました。

海田市駅に電話したら、広島が大火災との事で汽車は不通となりました。

この日の朝早い列車で中野村、畑賀村の人二百人位広島駅前の疎開作業に行かれたとの事でした。

お昼頃から線路を歩いて帰る人が駅によって水を下さいと言われました、それは黒く腫れあがった顔、焼けてボロ切れの様になった着物、ムゲテ垂れ下がった皮膚、ダラリと指先を下げ爪先立に手を前に出して歩く姿はさながら地獄の幽霊の様でした。

間もなく臨時列車が駅止めで到着したが客車の中や通路、デッキはヤケドの人、人皆で夕方まで担架で畑賀国立療養所へ運びました。

なぜ罪もない多くの人々が、どうしてこう言う苦しい目に合わなければならないのか ……　。

それから私は八月十三日に郷土防衛部隊の召集を受けて西条農学校に集合致しました。賀茂郡北部地域の二百五十人で隊長は白市の重光少尉で班長は志和

西の吉本政吉軍曹でした。肩に一つの星を着けて広島駅に十一時頃到着しました。

駅前に出るとまず驚いたのが、原爆ドーム（元の産業奨励館）が目の前に見えるだけで一面が焼けの原の瓦礫となっていたのです。八丁堀方面に行きここと で各班に別れて自分は広島二部隊の跡に行きました。

広島城のお堀に沢山の兵隊さんが折り重なって死んでおれる状景に一瞬棒立ちになりました。今でもこれを説明するには言葉がありません。直ちに小舟に乗って死体を引き上げる作業に取り掛かりました。むごたらしく焼け爛れた、皮膚もれ上がって水ぶくれになり、一体一体とても人とも思えない程でした。お家には両親が、妻子がおいでるであろう事を思うと一人一人送り届けて上げられないのが残念で残念でなりませんでした。でも名前すら判らない状態でした。

夜はカヤを張って野宿をし食事は一回に握り飯一個でしたが食欲も全くありませんでした。十四日からは幟町小学校と中国新聞社付近で三日間運動場の隅に穴を掘り油をかけて火葬する仕事でした。

次は牛田町に行き軍馬集めの作業でした。みな火傷をしていて足を引きずっているもの、とりわけ動物好きな私はやり切れない思いでした。手網もなく裸馬を集めるのは苦労しました。竹切れを両手にして馬の後方より追い寄せるのです。この内何頭生き残ったやら、今でも時折あの姿が浮かんできては空を仰いで溜息が出ます。

八月二十日、猛暑と異臭の漂う中での与えられた作業を終わり、次ぎの隊員と交替して広島駅で解散となり、複雑な思いで帰途に着きました。

戦争は絶対にしてはなりません。子供や孫が二度とこんな目に遭わないようにあの時の惨状を広く世界に伝え、平和な日々が送れるよう願って止みません。

「賀北部隊と被爆者救援」

松田　義景

『あれから五十年、当時私は十八歳であった』

本土決戦間近とみてか、国土防衛隊が昭和二十年五月創立された特設警備隊の一つに賀北部隊があった。賀茂郡北部地区（西条、高屋、八本松、志和、上黒瀬の各町）に在郷する陸軍予備兵役軍人の一部と十七・八歳の青年、学校で基本的軍事教練は受けていたが素人で正規には中国三二〇五〇部隊で本土決戦

でのゲリラ部隊であった。
　昭和二十年七月始めであったろうか、一度招集を受け仮本部の置かれた当時の西条農学校に集合した。入隊の時役場より三八式歩兵銃（実弾が撃てる）、帯剣、背嚢、雑嚢、水筒、飯盒を渡され実弾も一発受け取った記憶がある。完全ではないがより正規の装備に近い服装で赤ベタに星一つの階級章も付けた二等兵である。正規の兵隊は襟に付けたが私達防衛隊は左胸のポケットの上に一つだけ付けた。約二百五十名ぐらいの若者が集結し二中隊が編成された。直ちに広島市に向け出発、私達の班は千田町の御幸橋橋梁警備に付く。空襲時に備えてのことであらうか、この任務は一週間ぐらいで終わり本部西条に帰り解散した。
　昭和二十年八月六日広島に原爆投下（当時新爆弾、又ピカドンと言った）。広島は全滅賀北部隊に救援の出動命令がかかる。私は七日の午後十時頃だったろう、連絡を受けて本部に行く直ちに高和隊が編成された。先に工月隊は出発している。
　明けて八日早朝広島市入市三十名位だったろう。まず広島市役所に行く横川方面に配置され太田川ぞいに北上、川には水を求めて入ったのか、爆風で飛ばされたのか多くの死体が浮いている。一瞬にして廃墟、何千度という熱で焼けたというより溶けたといっても過言ではなかろう。
　横川橋を渡り左に約三・四百メートル横川駅西方約五・六百メートル地点であろうか川岸の空き地にコモをしいて負傷者を収容してある仮容所があった。約二百五十～三百名は居たように思う。その隣に仮兵舎を作り救援活動に入った。
　負傷者の看護、移動、死者の火葬・収容、巡回警備と暑い焼け付くような暑さのもと懸命に勤める。負傷者の水を下さい、水をくれ、悲痛な叫び、うめき、どこのどなたか名前も男女の区別もはっきりしない全身火傷の人、皮膚は破れ肉はぶら下がり、目は飛び出している、悲惨この上もない。夜間の巡回中水をくれと私の足にしがみつく者、朝の巡回時には死んでいる。一日に何体も何体も火葬した。暑い暑い日は続く私達の疲労も極限に達した。
　八月二十日過ぎだったろう帰途に付いた。本部の置かれていた天満小学校に立ち寄り広島駅に向かう。乗車と同時に賀北部隊は解散し各自帰宅する。
　八月十五日の戦争集結の報は収容所の兵舎で聞いた。帰る時は負傷者の数も少なくなっていた。引き取られた者、死んで行った人、残っていたのは二・三十人位だったろうか、なにしろ半世紀もたった現在数字的にはあまり定かではないが、ただあの時の負傷者の悲痛な叫び、うめきは今でも耳に残る。昭和六十二年NHKが放射能汚染追跡調査に当り、賀北部隊の救援活動にターゲットが当てられ東広島市郷土史研究会の協力により忘れかけていた隊員の消息もわか

り賀北部隊友会が発足した。当時の状況、原爆投下直後いち早く救援に出動した模様が隊員の口から判った。これを機に本部のあった西農跡地、現在の市中央公園南よりに賀北部隊原爆被爆者救援の碑を建立する。

毎年八月七日碑の前に友の会会員が集まり市長、議長、地元出身の国会議員の先生方をお招きして多くの犠牲者の冥福を祈り、核のない世界を願う観点から建立記念式典を行なっている。当時十七・八歳だった私達も七十に手がとどき、隊員も高齢化し亡く成られた人、体調の悪い人と出席者も年毎に少なく成ることは寂しい限りだ。

広島は七十年も八十年も草木も生えないと言われていたが今は大都市に成っている。八月十五日が来る度に遠く異国の地で散った多くの英霊、そして原子爆弾の犠牲になられた方々の御霊に心より合掌するものである。二度とこのような悲惨なことの起こらない様平和を願う一人である。多くの犠牲者の冥福を心より祈りつつ終わる。

白髪ふえ、記憶うすれし夏の午後
ただ犠牲者の冥福祈る。
我れ六八歳、身長一五二、体重四八五
体調すこぶる良好なり。

一九九五年 真夏

「核兵器廃絶は人類生存への情熱」

光野　昭三

被爆五十周年は、賀北部隊編成五十周年に当たります。

人類史上初の核兵器の惨禍の中から苦節を経て生き抜き半世紀、いま広島は壊滅から苦難を乗り越え新しい一歩を踏み出しました。

今年も、八月六日原爆投下の日を迎え平和記念式典が国内外から最多の人が集い、核兵器の廃絶と平和な世界の実現に向けて努力を続けていく決意が「平和宣言」として表明され、新たな地球平和を目指して一歩を力強く踏み出すことを全世界にアピールされ平和を誓った大きな節目の年でありました。

その翌七日に東広島市中央公園内（西農跡地内元部隊跡）救援之碑前で行なわれた「原爆被災者救援之碑建立記念式典」には来賓関係者が参列した。その人の輪の面々は、戦中戦後の苦難の中苦節を経て共に歩んできた皆さんであり

ます。
　賀北部隊友の会の一年一度のこの集いは五十年前原爆投下被災者救援のため週余を廃墟と化した広島市で灼熱、炎暑の中の救援処理作業に共に携わった皆さんである。
　あの日あの時、悲惨で目を覆うばかりの焦土に踏み入れた時目に映る光景は筆舌に尽くし難い、私の眼の中、耳の奥、胸の中、脳裏に五十年経った今も鮮明にいつまでも消える事はない。
　私達は僅日の隊員ではあったが戦友の絆にも似たものが去来し、集まった人々の顔が懐かしい。あれ以来五十年の加齢が一層愛着を深める皆さんの顔、顔である。
　今年で一つの区切りの時は通過した。だが、世界の何処かに核保有がある限り平和を望むことは出来ない。
　広島・長崎の姿勢、営みは重要である。
　あの原爆の威力と悲惨を体験したものしかわからない、この悪魔の核を廃絶することが新時代への資産であり、私達が希望する平和で安らぎのある未来を希求するころにあります。
　「生存への情熱」こそ人類共有の願いであります。

## 「核兵器のない平和を求めてー原爆の恐ろしさを知れー」

光本　充晴

　広島に原爆が投下されて五十年。当時十七才で西農三年生だった私は、八月六日午後三時頃先生からの伝達で賀北部隊に召集された事を知り、実習をやめてその足で部隊のあった西農北寮に入隊し、工月中隊（西条町 工月清中尉）第一小隊（隊長寺西村 柏尾誠伍長）に配属され、翌早朝五時に列車で西条駅を出発して広島の救援に向かった。
　その時に接した被爆の惨状は、この五十年間脳裏を離れる事もなく今でも鮮明に思い出される。
　見渡す限りの焼野原、ズルッと剥げて垂れ下がった皮膚、水を求め乍らやがて死んでいった全身火傷の負傷者、川面に浮かんだ無数の死体、迫り来る火を逃れたのであらう火傷の身を水槽に入って死んだ数知れない死者、川土手に日覆をした仮設病院に続々担ぎ込まれる重傷者その端から次々に息絶える人、死体を集めて次ぎか次ぎとめて焼いた幼年学校の校庭、炎天酷暑のもとあの時の広島はさながら地獄の様相であった。それでいて、ざわめきの中にも何と云え

ない不気味な静寂。
　広島は一発の爆弾で一瞬にして全ての生命を奪い廃虚の街と化し、七十年間は草木も生えず人も住めないと云われた。
　当時、私もやがて間もなく兵隊となりお国の為に戦場に向かい闘って死ぬと思っていた。軍都とは云え多くの非戦闘員を巻添えにしたB29の特殊爆弾（当時そう云われた）攻撃には云いえない腹立たしさを覚え、アメリカのやり方を憎んだことが思い出される。
　連日、負傷者の収容、死体の処理をして八月十三日に帰西して除隊となり翌春卒業し、やがて就職し今ではその職も退き今日に至っているが、当時、原爆の放射能を浴びた者は、ムラサキの斑点が出る、毛が脱ける、体がだるい。こんな事になったらもうおしまいで、やがて死が来ると云われており、酒を飲む人は原爆症は出ないなどの笑い話しもあった。私も原爆症は出ないだろうかと常にその翳におびえ頭の片隅に心配があった。二年ぐらいして、一ヶ月余に及ぶ黄疸で勤めを休んだが、このこと以外は幸いにして大事もなく老境を迎えるに及んでいる。
　太平洋戦争が終結して世界は東西冷戦構造となり核の抑止力、核の傘に守られ国の安全、核保有の力の均衡にたつ核兵器開発競争の激化により核を持つ国は増加し、冷戦構造が崩壊した今日でも、核実験、核武装、核拡散などの脅威は依然として続いている。なかでも制御のない核のヤミ売買はその危険度を増幅しているようだ。
　ここで私の述べたいことは、誰しも同じであろうと思いますが、核保有国はホントに（核の威力でない）核の恐ろしさを知っているのかと疑問に思っている。
　彼らの考えは、核攻撃を一早く探知して先に攻撃するから自分達は絶対に安全であるとうぬぼれているのではないでしょうか。
　また、原爆投下は正当であったと云う評価が今もって云われているが、そうした人達の場合は莫大な開発費により完成した原爆は使用しなければならなかったと云う環境にあったのだろうと思われる。かたや、戦争の進展により兵隊どうし相い対の闘い以外に東京・大阪など人と街を狙った無差別爆撃の繰り返しにより人間的、人道的に人間性のマヒした感覚が原爆投下の命令を下したのだろうと考えられてなりません。
　日本軍の敗退により沖縄が戦場となりやがて本土決戦、連合軍の本土上陸により百万人の死傷者が予想され、原爆投下はこうした事態を回避し日本の降伏を早めるために必要な手段であったと云われておるようですが、“その為には広島の人はあのように死んでも良かったのか、他に方途はなかったのか、原爆の正当性のためには容認されなければならなかったのか”私は大きな疑問と強

い憤りを覚えるものであります。
　平成六年六月七日（火）の新聞報道に依れば核兵器使用に対する国際司法裁判所の求めに、日本政府は条件付ながら「国際法違反とは云えない」とした意見陳述書を出された様でありますが、地球上で唯一の被爆国日本がナゼはっきりと真正面から違法性を主張しないのか、日本政府の在り方姿勢に疑問を感じてなりません。
　このような時にあってこそ、平和の原点としてそして核の脅威を取り去るためにも被爆の実体を風化させてはならないと思います。
　自分だけの正当性、相手の痛みを考えない、自分の力を誇示して他を押さえ付ける、うらみ、憎しみ、こうしたことの繰返しでは平和はこないと思います。
　五十年たった今こそ核兵器の恐ろしさを知り、自分の正当性だけを主張しないで、相手の痛みを考えそして憎しみを越えてこそ平和の灯りを見る事ができるのではないでしょうか。

「被爆五十年の回顧と懺悔」

本岡　文三

　昭和二十年八月六日八時十五分、閃光一瞬軍都広島は火の海と化し、一夜にして焦都となったのである。
　あれから五十年、すべては目まぐるしく変わっていった。「今後一〇〇年この地には草木も生えないであろうし、又、人も生むことは出来ない」と言われた原爆の跡地（旧市内）に今、六十万の人が住み、既に住居を建てるべき土地の空間もない。自然は蘇り、往時を遥かにしのぐ街の復興がもたらされたが、これですべてが清算された訳ではない。
　今、静かに五十年前を回想しながら、改めて十数万の原爆犠牲者の冥福を祈るものである。
　私ども賀北部隊が、原爆の救援に入市したのは、爆投下の翌日即ち八月七日であった。事情があって私は三日間で任を解かれて帰郷したが、この短い間にも忘れ得ぬ痛ましい回想が、今も懺悔と共に深く脳裏に残っている。

　ー水を下さい兵隊さんー
　それは八月七日のお昼前、私どもの部隊が東練兵場から西練兵場へ移動する時のことである。一望焼野原、建物の残骸や瓦礫の間に、おびただしい負傷者

がうずくまり、或いは横たわって、口々に「水をくれ」、「水を下さい」と声を掛けていた。その中に一きわ声だかに「水をやって下さい。この子は死ぬんです」と悲壮な形相で、既に垂れ下がるようになった坊を抱え、火ぶくれの手で、なだれるように寄掛かってくる母親があった。その目は、すでにこの世のものとも見えぬ凄まじいものであった。思わず、ギョッと立ち止まったが、たじろぐように私は「水筒は空っぽです」と、ふり払うようにして隊列に続いた。

しかし、その母親の悲痛な叫びが、そしてあの鋭い目が後を追ってきた。それは五十年経った今もはっきりと脳裏に残っている。その時私の水筒には、僅かの水が残っていた。お昼の握り飯をいただく時、私はどうしてもそれが飲めなかった。私は食後負傷者にそれを心をこめてさしあげた。

今にして、あの自らの死を目前にして、我子に末期の水をと求めた母親の悲願をなぜ、叶えてやらなかったかと悔やまれてならない。

－被災犠牲者の葬送－

西棟兵場では、連日被災負傷者の救護と、屍体の担送作業であった。 何せ予告のない一瞬の突然死である。瓦礫や飛来物での負傷出血死、爆風による死亡等々、様々なその最後の様態は、実に見るに忍びない地獄絵であった。酷暑の期、時日を経るに従って遺体は腐らんし、更に悲惨さを増していった。殆ど衣服のない体は、全身やけただれ、手を引っ張り、足を持ち上げるにも、ぬめり抜けて容易に担架に乗らなかった。

こうして一体又一体と、真夏の太陽の下で汗と埃と煙にまみれての搬送は、誰の顔にも苦悩と忍従が充ちていた。そこには心ならずも原爆犠牲者を悼む心の余裕はなかったであろう。

今にして思えば、長い病床で、手篤い看護の末の臨終であっても、最後の離別は、肉親なれば誰もが慟哭し借別することであろう。殊にこの悲惨な姿に接しられる時、その嘆きはどんなであったろう。今そんな思いが回想する。

浄土真宗では還相回向とさせていただく。今年、五十年忌を迎えられた原爆犠牲者のみ仏に改めて懺悔のうちに称名念仏するものである。

－戦争は終わったが－

原爆投下後、九日目にして第二次世界大戦は終わった。世界の国々は改めて核兵器の恐ろしさを知った。

米国は原爆投下を、戦争終結の手段であったと言う。そして今もなお、それは修正されていない。しかし、そんな無謀な論理が許されるのだろうか。

あれから五十年、「世界平和」「戦争のない世界」を標榜されながら、以後未

だ一時期たりとも世界中戦争のない時代はなかった。現在もそうである。
　しかも、なお、未だに核による脅威が、国力のバランスを保つ具とされている。フランスは依然として核実験を継続している。世界唯一の原爆被爆国日本は、更に我々広島人は、断乎としてフランスに抗議しなければならない。そして必ずや国際世論をもって早期停止を取り付け、地球上に核兵器の廃絶を実現しなければならない。
　これこそ被爆五十年を迎えた今日の我々が、原爆犠牲者に手向ける鎮魂の誓いである。

## あとがき

　原爆被災者の救援に参加した私達が賀北部隊友の会として今日に至ったのは、昭和六十二年（一九八七年）春にNHK広島放送局原爆プロジェクト・チーム（北出 晃・高柳正幸・室井民雄・菅野利美の四氏デレクター)からの一本の電話でした。
　日本放送出版協会発行の「ヒロシマ 残留放射能の四二年“原爆救援隊の軌跡”」によると彼等の意図は、入市被爆者の放射能影響調査集団として賀北部隊々員の全容を掴む事と、毎年八月放映の原爆特集番組の取材でした。
　纏まった記録も資料もなく、僅少な手懸りから様々な手段と方法で昼夜を分かたぬ努力と東広島郷土史研究会（会長 宮川忠孝氏）の協力によって全員の六八％当たる約一七〇名が確認されました。
　賀北部隊解散以来四二年間、隊員同士交流もなく、あの原爆地獄の中で救援に当たり、自らも放射能を浴びた救援隊も時の経過と共に霧消しようとしていた時に、前記の様な次第でその存在が浮かび上がったのでした。
　折角判明した賀北部隊の存在を被爆者救援の記録として後世に伝え、平和を訴えるために、部隊のあった西農北寮跡に見合う東広島市中央公園に「原爆被災者救援之碑」を建立し、爾来、部隊の第一陣が入市した八月七日には会員が相寄って時をしのび、平和を祈念して建立式典を行なってきました。
　しかし、会員の老齢化が進み、その集まりも次第に困難となって来たことでもあり、たまたま今年は被爆五十周年にも当たりますので、何か記録を残そうと云うことでこの手記を発刊する事となりました。戦後五十年、繁栄を続ける日本、その中にあって天を突いて林立するビル群、行き交う人の流れ、光り輝く広島の街を見るとき被爆のあの惨状を伺い知る影もありません。しかし広島は、かつて人も馬も草木も建物も、ありとあらゆる物は一瞬にして打ちのめさ

れ、焼き尽くされ、一望千里の焼野原となったのでした。

それは、あの日八時十五分に炸裂した一発の原子爆弾によるものであった事は紛れもない事実であります。しかし、歳月は流れ、ややもすると悲惨な原爆の実体が風化しつつあります。こうした時に当たり、お寄せ頂いた手記はまざまざとあの現状を表現し原子爆弾の非情と不法性を訴えています。

編集に当たり、手記の一編々々に接する時あの時の状景が思い浮かび度々涙するものがありました。ご寄稿に感謝し、あらためて原爆犠牲者のご冥福をお祈りすると共にこの小冊子が、核兵器廃絶への一助となることを望んで編集の弁と致します。